

眺望景観と歴史的都市の構造に関する研究

宮下 真紀子¹・佐々木 葉²

¹学生会員 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:miyashi@fuji.waseda.jp）

²正会員 博士（工学） 早稲田大学理工学部社会環境工学科（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp）

景観まちづくりの手がかりとして、景観から地域性を発掘するという視点はきわめて重要である。本研究では眺望景観に着目し、日本の歴史的都市20箇所の現地調査で得られた俯瞰景と通り景からケヴィン・リンチの分類に照らして都市構造を読み解き、構造型眺望という観点から都市のidentityを発見する手法について考察を行った。また、同じ観点に立ち、地勢と都市規模によって調査都市を分類し、都市構造を際立たせる眺望景観コントロールへの示唆を行った。

キーワード： 眺望, 俯瞰景, 通り景, 都市構造, 都市のイメージ

1. 研究の背景と目的

2005年6月に景観法が全面施行され、各自治体の景観に対する取り組みはますます活発になってきている。

景観への意識の向上と共に、眺望景観についても議論がされるようになりつつある。国会議事堂裏の議員会館建替えが議事堂へのヴィスタ景を乱す、という議論は眺望景観保全問題の先駆けとなった¹⁾。また、金沢市の眺望景観保全区域指定や、岡山市の背景条例など、眺望を保全するための先駆的な取り組みもいくつかある。

構図的に美しい景を保全することや、整った町並みを創出することは確かに重要であり、景観法は強力な後ろ盾となっていくだろう。しかし、これらの一連の動きは、景観づくりに偏りがちであり、景観を読み解くという観点が忘れられていることは問題である。

景観からまちづくりを行おうとすると、まず、景観から地域の identity を発見することが肝要であるが、これまでそれを文化財や歴史的町並みなどの「特別な景」に頼りすぎていた。地形や都市骨格に目を向けることは、本質的な地域性を探ることにつながり、安易な電線の地中化や舗装整備に代表されるような表層的な景観づくりや、画一的な再開発からの脱却を図る手がかりとなるのではないだろうか。

本研究では眺望景観に着目し、構図的な美しさではなく本質的な地域性を読み解くという観点で、その価値について考察する。

2. 研究の位置付け

本研究に関係が深い研究が次に挙げる2つである。

まず、K・リンチの「都市のイメージ」であり、ここでは「都市構造がわかりやすい都市」にはそれだけで価値があることを述べ、都市のイメージをつかむ要素として、district・edge・landmark・path・nodeの5つが挙げられている。これは、アメリカの大～中規模の都市においてその地域に長く暮らす人がどのように都市構造を把握しているかをインタビュー調査した研究結果などによるものである²⁾。

次に、樋口忠彦の「景観の構造」があり、そこでは、日本のランドスケープを水分神社・秋津州やまと・八葉蓮華・蔵風得水・隠国・神奈備山・国見山の7つの型に分類している。またその空間構成要素として境界・焦点/中心/目標・方向・領域の4種類を挙げ、古くからの日本のまち、むらの構造をマクロに説明した³⁾。

本研究では、現地調査を行い、まず、リンチの5分類に従い、都市構造要素による景観の分析を行う。対象とする眺望景観は、高いところから市街を見渡す俯瞰景と、アイレベルで一方向に視界が抜けている景、すなわちビスタ、山あて、歴史的町並みなど、これまでにもその価値が認められ、一般的に保全が進められてきた通り景に分けて考え、この2種類の景観がどう関わりあっているかという点に着目し、描かれている都市構造を分析する。

この分析を受け、後半では樋口の研究を参考に都市構造のタイプ分類を行った上で、タイプ別に得られる景観の特色を抽出し、考察を行う。

3. 現地調査

現地調査は、先駆的に景観保全を進めてきた地域であること、また古いまちの方が地形や自然環境に依存した都市構造が分かりやすいのではないかという期待から、主に伝統的建造物群保存地区から対象地を抽出し、2004年7月から12月に以下の地域で行った。

表-1 現地調査地域

所在地	都市内の歴史的地域の種類	所在地	都市内の歴史的地域の種類
北海道函館市	港町	岡山県倉敷市	商家町
青森県弘前市	武家町	広島県豊町御手洗	港町
秋田県角館町	武家町	広島県竹原市	製塩町
石川県金沢市	茶屋町	山口県萩市	武家町
岐阜県高山市	商家町	福岡県甘木市秋月	城下町
岐阜県白川村	山村集落	福岡県吉井町	在郷町
岐阜県郡上市	城下町	佐賀県有田町	製磁町
滋賀県五箇荘町	農村集落	長崎県長崎市	港町
滋賀県近江八幡市	商家町	宮崎県日向市美々津	港町
兵庫県神戸市	港町	宮崎県日南市飫肥	武家町

地形図と俯瞰景の対応をもとに、都市構造要素の抽出を行った。また、調査で訪れた俯瞰景の視点場からの俯角の情報をまとめたものを表-2、表-3に示す。

それぞれの都市は、表-2にあげたような都市構造要素の組合せによって説明することができる。しかし、俯瞰景による都市構造分析を考えるにあたり、そのスケール感に対する考察は避けて通れないところであろう。市街

の広がる面積、山との距離、視界に入る海の割合など、都市構造に関する要素があるかなしただけではなく、その規模がまちの印象を決めていることは間違いない。また、主に田園風景、港の風景において、「日本らしい」と感じることも、一つはこのスケール感に起因しているのではないだろうか。

都市のスケール感を景観的に測る指標の一つとして、俯瞰景による眺望可能域が考えられる。実際の面積を測ることは難しいが、視点場から「印象としてのまちの端」までの距離は比較的容易に測定できる。（表-3、図-1）

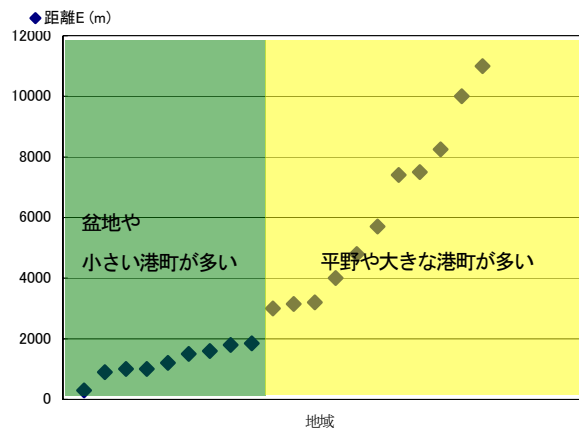


図-1 まちの端までの距離と地勢

本研究では都市構造の分析手法の考察に重きを置いたため、スケールに関する調査は実験的なものにとどまっております。今後課題が残っている。

表-2 都市構造要素に関する調査

地域	地形	古い町並	近い山	遠い山	独立峰	海	川	並木	駅	市役所	駅前大通	外周道路	基盤の目	観光化
函館	湾に沿った港	一部	一方向	○		二面	端	○	端	中心	○		○	+
弘前	平野	一部	なし	○	○		端・中心	○	端	中心	○			-
角館	山中の盆地	半分	二方向		○		端・中心	○	端	中心	○	○		+
金沢	平野・台地	一部	一方向			一面	中心		端	中心	○			+
高山	山中の盆地	一部	一方向	○			中心		中心	中心		○	○	+
白川村	山中の盆地	全体	全方向				中心		なし	別の集落		○		+
郡上八幡	山中の盆地	一部	全方向				中心		端	端		○	○	-
五箇荘	湖沿いの平野	ほぼ全体	三方向	○			端		端	端		○	○	-
近江八幡	湖沿いの平野	一部	一方向	○	○		端		端	中心	○	○	○	±
神戸	山と海の間	一部	一方向			一面	なし	○	中心	中心	○			+
倉敷	山と海の間	一部	一方向	○	○		中心	○	端	端	○			+
御手洗	山と海の間	全体	一方向			二面	なし		なし	別の集落		○		-
竹原	山と海の間	一部	三方向		○	一面	中心	○	端	中心	○			-
萩	デルタ地帯	一部	三方向		○	一面	囲む		端	中心		○		+
秋月	山中の盆地	全体	全方向				端・中心	○	なし	別の町		○		+
吉井	平野	一部	二方向				端・中心		端	中心				-
有田	谷あい	ほぼ全体	全方向	○			中心		端	中心	○	○		+
長崎	山に囲まれた湾	一部	二方向		○	一面	中心		中心	中心				+
美々津	海沿い	全体	一方向			一面	端・中心	○	端	別の町		○		±
飫肥	川に囲まれた平野	ほぼ全体	二方向	○			囲む		端	別の町		○	○	+

表-3 俯瞰景と都市規模の関係

地域	俯瞰景視点場	経路	視界	視点場 標高 (m)	市街 標高 (m)	高度差 (m)	距離近 (m)	距離 L (m)	距離 E (m)	俯角近 (度)	俯角 L (度)	俯角 E (度)	都市 規模
函館	山頂展望台	ロープウェー	○	332.5	3	329.5	900	2400	11000	20.1	7.8	1.7	大
弘前	(市役所屋上)	なし	○	46	31	15	市街が見える視点場なし						大
角館	山頂	遊歩道	○	168	55	113	500	1500	3200	12.7	4.3	2.0	小
金沢	丘陵展望台	車道	○	141	10	131		2700	8250		2.8	0.9	大
高山	山・車道	車道	△	604	570	34	100	400	1800	18.8	4.9	1.1	中
白川村	城山展望台	車道	○	545	490	55	375	375	1000	8.3	8.3	3.1	小
郡上八幡	城天守閣	遊歩道・車道	○	340	222	118	300	650	1600	21.5	10.3	4.2	小
五箇荘	山・寺社	山道	△	325	105	220	800	1850	3150	15.4	6.8	3.9	小
近江八幡	城山展望台	ロープウェー	○	272	90	182	600	3000	5700	16.9	3.5	1.8	中
神戸	山・建築など	ロープウェー・遊歩道	○	270	34	236	1000	3500	7500	13.3	4.3	2.0	大
倉敷	山・墓地・車道	遊歩道・車道	△	53	3	50	600	1300	3000	4.8	2.2	1.0	大
御手洗	丘（整備）	石段	○	25	0	25	70	200	900	19.7	7.1	1.6	小
竹原	寺社	石段	○	35	2	33	100	1000	1200	18.3	1.9	0.2	中
萩	車道	車道	○	372	26	346	1100	1800	4800	17.5	11.6	4.4	中
秋月	山間の橋	車道	○	160	116	44	420	650	1000	6.0	4.0	3.4	小
吉井	隣町の山頂	車道	○	150	30	120	600	900	4000	11.3	7.6	1.7	小
有田	山	山道	○	200	77	123	300	800	1850	22.3	8.6	3.2	小
長崎	山	ロープウェー・歩道	○	170	60	110	400	1950	7400	15.4	4.9	1.1	大
美々津	丘	遊歩道	△	35	15	20	200		300	5.7		5.5	小
鉄肥	公園	遊歩道	○	40	19	21	200	270	1500	6.0	4.4	0.8	小

距離（俯角）近：視点場から市街の一番近くに見える地点までの直線距離，俯角

距離（俯角）L：視点場から市街の特徴的な構造物までの直線距離，俯角

距離（俯角）E：視点場から正面の山並みなど市街が途切れる地点までの直線距離，俯角

4. 眺望景観に関する考察

(1) 俯瞰景

a) 俯瞰景とは

俯瞰景は都市構造を一挙に把握するのに最適な景観であろう。本論において俯瞰景とは、俯角を持って市街地を望む、視点場と視対象の間に断絶がある景のことをいう。豊かな俯瞰景の条件として、十分な可視領域・意外性・納得性の3つを挙げておきたい。本研究では、都市構造把握を論点としているので、このうち納得性が主要なテーマとなる。

b) 俯瞰景の分析

俯瞰景から得られる都市構造の要素として主なものは、リンチの言葉を借りれば district・edge・landmark の3つである。path や node の特徴はディティールに現れることが多いので、視線の位置と道の方向があっているか、

よほど大規模で edge や landmark の性質を持ってくるもの、俯角が大きく鳥瞰に近いもの以外は埋もれてしまって分からない場合が多い。俯瞰景から得られる要素の具体例をリンチの分類に従って以下に挙げる。

俯瞰景の調査事例を以下に示す。

● 郡上市八幡町



図-2 八幡町俯瞰景

四方を山に囲まれ、川を中心に小ぢんまりとまとまっているまちである。視点場は城山の頂上にある天守であり、道程も整備されている。俯瞰景として十分な可視領域を持ち、納得性も高いといえる。

表-2 俯瞰景から得られる主要要素

district	屋根勾配（陸屋根か、勾配屋根か）／屋根色／建築高／海・湖／田畑／市街地の広がり・形／人工島
edge	海岸線／田畑と住居の境／山の端／道・川・線路（俯瞰景からは得られにくい）
landmark	ビル・ビル群／大建築／鳥居／塔／特徴的な山・近い山（視点場になることが多い）／波止場／橋／空き地（グラウンドなど）

表-3 八幡町の俯瞰景から得られる要素

district	市街地
edge	高速の高架／吉田川／山
landmark	安養寺（ふもとの寺）／八幡病院／新橋

(2) 通り景

a) 通り景とは

俯瞰景が都市構造を把握するのに大変有効であることはすでに述べたが、日常的な活動の中でどのように都市構造が理解されているのかを次に考察する。

視点場と視対象の間に断絶がある俯瞰景に対して、視点場と視対象が視覚的に繋がっていて、一方向以上に視界が開けている、アイレベルからの景をここでは総称して通り景と呼ぶ。

b) 通り景と都市構造の関係

都市での活動において、現在地から目的地へ到達しようとするとき、私たちはまず方向感覚を得ようとする。理解しやすい都市構造があるということは、この情報を得る上で非常に有利なのは明らかである。たとえば川と国道と鉄道が平行に走っている、地域の端にわかりやすい形の山がある、などを知っていれば多少道に迷っても自信を持って行動できる。反対に目標となるものがないまちでは、地図や案内板無しに行動することは難しく、常に不安が伴う。都市構造がわかる通り景とはいわば天然の案内板であり、信頼できる貴重な情報といえるだろう。大都市であるほどこういった景観は得られにくい傾向にあるかもしれないが、一方で超高層建築がランドマークとなって役割を担っている。

b) 通り景の分析

アイレベルからの景観は、リンチの5要素を組み合わせることで分類できると考えた。以下、この方法で表現した例を挙げる。

表-4 通り景の分類

pathから見える要素が特徴的な景観	
landmark	山／塔／建築／鳥居／稲荷
edge	海／港
node	橋／ロータリー
district	市街地／田／広場
要素そのものが特徴的な景観	
path	川／並木／坂道／階段／歴史建築／道幅／D/H
edge	公園／堀／山際／高架／線路
node	三叉路／五叉路／ロータリー／鍵曲
district	田／畑／広場
その他	
edgeに沿ったpathである	川沿いの道／港沿いの道
edgeがdistrictを分ける	川／線路

通り景が都市構造を説明する事例を以下に示す。

● 岐阜県白川村

であい橋—観光拠点として巨大駐車場などを持つ地区と、世界遺産の集落を繋ぐ。



図-3 白川村であい橋

川という edge が district を分けている。さらにそれを繋ぐ橋という path を特徴的なデザインの歩道橋としたことで印象に残る景観となっている。

● 岡山県倉敷市

倉敷美観地区—倉敷市の観光拠点である。



図-4 倉敷美観地区

古い白壁の町並み、川、並木と3種類の特徴ある path が並んでいる。町並みから他のビルなどが見えないように景観コントロールを行い、特徴的な path の魅力を保っている。

● 北海道函館市

元町地区—函館山のふもとに古い洋館が並ぶ。



図-5 函館元町地区

坂道という path は山麓という district としての都市構造を表現しているといえる。また、突き当りの海という edge まで視界が一直線で開けている。

(3) 俯瞰景と通り景の関係性

同じ対象を俯瞰景と通り景によって見た場合、表-5のような違いを持って認識されると考える。

俯瞰景と通り景の両方を体験した場合に、もしそこに対応関係を認めることができるのなら、その土地に対する理解（＝納得性）が深まるだけでなく、感動や愛着という点でもただその土地に暮らしたり訪ねた

りするよりも高い効果が得られるだろう。

表-5 俯瞰景と通り景の関係性

俯瞰景	通り景
対象の上面を見る	対象の横面を見る
要素の全体を把握	要素の部分を把握
対象場の概要を把握	対象場の詳細を把握
対象同士の関係性を把握	自分と対象の関係を把握

2 種類の視点から同じ要素を見るという方法での都市構造の把握例を、視対象の要素によって都市のイメージの要素ごとに分類し、以下に示す。

表-6 俯瞰景と通り景の関係性—具体例

<district> 岡山県倉敷市—鶴形山			
俯瞰景	山の全体を把握できる。まちの中における山の位置関係がわかる。		
通り景	町並みの背景としての山。山の一部分が町並みに色味を与える。	図-6 岡山県倉敷市	
<edge> 広島県豊町—瀬戸内海			
俯瞰景	海岸線の形状が分かる。		
通り景	海が広く開け、護岸や波止場の素材感などのディテールが分かる。	図-7 広島県豊町	
<landmark> 岐阜県高山市—宮川鳥居			
俯瞰景	鳥居を手がかりにそのそばの緑の軸が川であると分かる。		
通り景	鳥居と並木と川を一度に見ることが出来る。鳥居を手がかりに自分の現在地をつかめる。	図-8 岐阜県高山市	
<path> 秋田県角館市—桧木内川			
俯瞰景	川の流れの形が分かる。桜が土手にぎっしり並んでいるさまがわかる。		
通り景	護岸のディテールが分かる。視界いっぱいに並木と川が広がる。	図-9 秋田県角館市	
<node> 北海道函館市—市役所前			
俯瞰景	landmark ともなる node である函館市役所を中心に、並木が十字に伸びる。		
通り景	並木がビスタを形成し、node にある市役所がアイストップになっている。	図-10 北海道函館市	

(4) 眺望景に関する考察のまとめ

これら 3 種類の都市構造の把握手法によってどの程度情報が得られるかということから、それぞれの都市の持つ特徴について大きく分類することができると考える。

俯瞰景から情報が得られやすい都市は「都市構造がわかりやすい」都市であり、通り景からの情報が得られやすい都市は、「特徴的な景観が得られやすい」都市であるといえる。どちらも景観資源として貴重なものではあるが、両方からの情報が得られる都市は「特徴的な景観を都市構造に結びつけて考えることができる」点で際立って価値が高い。

文化財や突き当たりに山が見える景観、川沿いの遊歩道など、それぞれは点的、線的な景観資源であるが、都市構造とのかかわりが理解されれば、都市という面的な広がりの中での位置関係を認識でき、都市の理解という点において一層の価値を持つ。その機会としての重要な役割を俯瞰景が担っている。

5. 都市構造と景観の関係

(1) 都市構造のモデル図化

都市構造と景観の関係を調べるに当たって、まず都市の全体像を簡潔に示すために都市のモデル図化を行う。本研究では前述の「都市のイメージ」、「景観の構造」を参考に、都市構造要素を 4 つのレイヤーに分けて考えた。モデル図の一覧を図-12 に示す。

表-7 モデル図化に用いるレイヤー

地勢	山・大河川・湖・海・傾斜
市街の広がり	古い町並み・新しい市街地
軸線	鉄道・目抜き道路・中心を横切る道路・外周道路
焦点	ランドマーク

表-8 都市構造タイプと得られる景観の共通点

	大きい港町	小さい港町	平野の大都市	平野の中小都市	山がちな中小都市
俯瞰景	- 市街の広い範囲と海岸線を一望できる山がある - 明確な edge としての海岸線の特徴的な形状が記憶に残る	- 海そのものの持つ強い印象と静かなたたずまいの市街 - 海岸線までの俯角により海が与える影響力が変わる	- 限が無く広がる印象 - まとまった緑地が都市構造把握に役立つ	- 悠然と広がる印象 - 田園との境界によって市街のまとまりを把握できる - 遠くの山裾によるゆるい edge を持つ - 街路骨格が読み取れる	- 景観が持つ構造よりも地勢そのものがまちを印象づける - 領域の認識を強く持つ - 城下町が多い - 一体感のある低層建築群を持つ
通り景	- 坂の景 - 坂⇒海 - 坂⇒市街 - 坂と並木 - 近代洋風建築群 - landmark となる橋梁	- 海に臨む景を多く持つ - 純和風建築群	- path のディテールが注目される - 唯一の地勢である河川空間の整備状況がまちの印象を左右する	- 田に沿った街路が集落を分ける - 大河川がまちを区切る - 独立峰への山あてを意識した景を得る - 歴史のある水辺空間が残る	- 山への眺望を持つ - 河川はまちの象徴となる - 自然が豊富である

(2) 都市構造の分類

描いたモデル図と地形図、航空写真、また表-2、表-3の結果を勘案して、各都市を大きく二軸上に分類した。3章で述べたように都市のスケール感がイメージに与える影響が大きいと考えられることから、縦軸に都市規模とし、横軸に地勢とする。横軸については中央を平野とし、右へ行くほど山がちとなる。また左側は海を持つまちであり、左へ行くほど港町としての性格を強く持つものを置いた。そしてこの座標上から類似するものを、大きく5タイプに分類した。

このタイプごとに共通な景観を探し、さらに下位の都市構造要素による景観の違いを考察する。

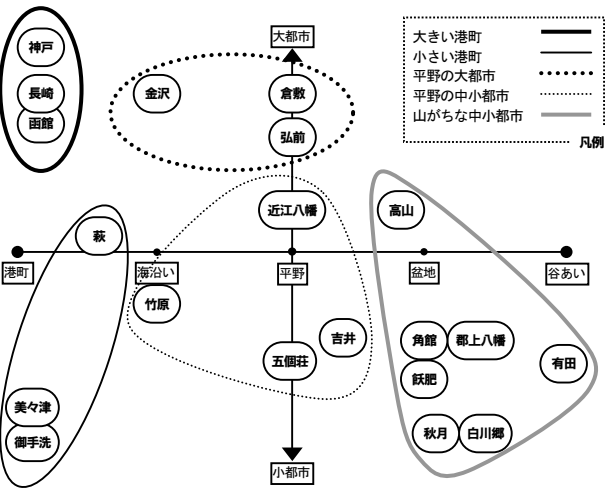


図-11 都市構造タイプ分類

(3) 都市構造タイプと得られる景観の関係

(2) で分類したタイプごとに特徴的な景観を抽出し、その共通点、相違点をまとめたうえで、考察を行った。

図-12 都市構造モデル図一覧

函館	白川郷	倉敷	吉井
弘前	郡上八幡	御手洗	有田
角館	五箇荘	竹原	長崎
金沢	近江八幡	萩	美々津
高山	神戸	秋月	飫肥

(4) 景観コントロールへの示唆

表-8 で得られた知見から、都市構造を感じさせることによって identity の向上を図るための景観コントロールへの一つの示唆となりうるよう検討を行う。

a) 大きな港町

俯瞰景では海岸線の edge が強く印象に残るので、海岸線沿いに建築を建てる場合は、俯瞰景から、またライトアップでの edge としての見え方を意識する必要がある。

通り景としては海の景観、山の景観、斜面地の景観を取り揃えて有し、市街地からは明治以降の近代化の歴史が読み取れる。また、海辺にランドマークを持つ。なかでも、斜面から海を望む景観、斜面から市街を望む景観は坂のまちとくに港町特有のものである。坂から海を望む景観を持つためには、斜面が海ぎりぎりまで迫り、かつ視線をさえぎるものが無い必要があり、建築一つの配置によって簡単に失ってしまう景観であるので、これを考慮した高さ規制などのコントロールが必要となる。

b) 小さな港町

俯瞰景からは海岸線よりも海そのものの景観が印象に残る。そこで、海の印象を変えてしまう護岸や消波ブロックの構造物に配慮する必要がある。

通り景では海沿いの道から海に臨む景を意識し、護岸などのディティールに配慮する。歴史のある港町の場合、昔ながらの施設などを意識したしつらえを残すのも効果的である。

港が栄えた歴史を伝える古い町並みはこのタイプにおいては特に強い identity となるので、そのまちにとって当たり前の景観であっても保全の意識を高める努力が必要である。

c) 平野の大都市

俯瞰景からは都市構造把握の手がかりが得られにくい。まとまった緑地が唯一の自然資源となるので特に保全に努めなければならない。

特徴的な地勢に恵まれないため、微地形を読み解いてアイレベルでの景観形成を充実させていく必要がある。また、通り自体の景観の向上が重要になる。印象的な通りや高層のランドマークは観光名所となる。通りの先に山が見える景観を得られるのは貴重なので、重点的に保全を行うとよい。唯一よりどころとなる都市構造である河川の整備状況が都市の印象に与える影響は大きい。

d) 平野の中小都市

俯瞰景では市街のまとまりと田園が、都市のスケールを表現している。遠くの山裾がゆるやかな edge となるため、edge を感じない大都市よりもかえって大きな

領域を眺めている印象を受ける。周囲の自然が手付かずで残っている場合が多く、誰もが気楽に登れる視点場を持っていないことが残念である。どこにでもロープウェイを作るべきとは思わないが、登山道の整備や期待に応える山頂からの眺望の確保に努めるのが良いだろう。

通り景では山あての景観が得られやすい地域であり、多くの人がその景観を認知しているであろうことから、その特長を生かしたまちづくりを行いやすい。

田と市街の境界となる街路はこのタイプの特徴である。もしこの街路が長距離で直線的であれば、その境界性を保つと良い。他の街路と交わる地点などに landmark となる建造物があると、俯瞰景からも通り景からも位置把握の目安となるだろう。

e) 山がちな中小都市

盆地という地勢が印象的であり、領域の感覚を強く持つ。低層市街が集積しているとその印象はなおさら強くなる。日本のふるさとの景観であり、眺望に入る範囲に奇抜な建造物を建てないことが他のどの地域より重要になるだろう。

通り景では川がまちの象徴となる。どの方面にも近くに山が望める。この組み合わせの景が得られる河川空間が丁寧に整備されているとまちの identity は向上するだろう。またメインストリートに賑わいを演出するとまち全体としての寂れた印象がなくなる。

表-9 景観コントロールへの示唆

	俯瞰景	通り景
大きい港町	海岸沿いの建築物	坂からの眺望の保全
小さい港町	沿岸の構造物	護岸のディティール 古い町並み
平野の大都市	まとまった緑地	山を望む景 河川 通り自体の特徴
平野の中小都市	視点場からの眺望・経路 整備	山あて 田と市街の境界
山がちな中小都市	奇抜な建造物の排除	河川空間 通りの賑わい

6. まとめと今後の展望

本研究は、地域の identity を認識する手法として、美しい景観や、歴史的価値のあるものを保全するのみの従前の景観整備への問題提起として、都市構造把握にもとづき景観を発見することの意義を確認することが目的であった。

歴史的都市 20 地域の俯瞰景、通り景の調査を経て、都市構造的に景観を読み解く方法について考察を行っ

た。また俯瞰景と通り景を対応させて考えることで、点や線の情報を面の情報として捉え、都市全体のしくみを把握できることを示し、その価値を述べた。

さらに、都市ごとの景観を比較し、都市構造のタイプによる景観の特徴について述べると共に、都市構造把握という観点からの景観コントロールへの示唆を行った。

本稿では主に定性的に景観の分析を行ってきたが、日本的なスケール感や俯角が眺望景観に与える影響などについて、さらに定量的な分析を行っていき、今回の考察を裏付けていく必要がある。例えば都市規模の大小によって、印象に残る都市構造のレベルが違うのではないかという考察ができる。大きな港町の俯瞰景の面白みは海岸線の独特な形状、edge を一目で把握できることにあると考えられるが、漁港や海辺の小さなまちでは、海そのものの持つ風情や海辺の生活感などに感動する。このことを考える上で、海岸線までの俯角は一つの指標となるだろう。神戸が 2.0° であるのに対し、萩で 4.4° 、美々津で 5.5° 、御手洗では 7.1° であり、本調査の印象としては 5° 近辺でこの変化が起こるのではないかと感じた。しかし、函館や長崎のように形状が独特な湾においては一概に言えず、更なる考察が必要である。

どんな地域にあっても、景観保全や整備施策のバックボーンとして、美しい、美しくないという観点からは離れ、まず、都市構造把握に則った景観調査がなされるべきであり、そのための論点の体系化を目指し、この研究を続けていきたいと考えている。

謝辞：本研究において京都大学門内輝行教授には始終ご指導を頂きました。厚く謝意を表します。

参考文献

- 1) 眺望景観研究会：眺望景観のパースペクティブ①，季刊まちづくり 1，pp.45-65，学芸出版社，2004
- 2) リンチ・K：都市のイメージ，岩波書店，1968
- 3) 樋口忠彦：景観の構造，技報堂，1975
- 4) 樋口忠彦：日本の景観，春秋社，1981
- 5) 文化庁文化財保護部建造物課：歴史的集落・町並みの保存 重要伝統的建造物群保存地区ガイドブック，文化庁，2000
- 6) 中村良夫：風景学入門，中央公論社，1982
- 7) 財団法人都市計画協会：平成 15 年度版都市計画年報，2004
- 8) 日本建築学会：まちづくり教科書第 8 巻 景観まちづくり，pp.10-11，丸善，2005
- 9) 西村幸夫，町並み研究会：日本の風景計画，学芸出版社，2003